

芦雁図

土佐光起筆 一幅

紙本墨画

縦二八・一 cm

横五八・九 cm

(兵庫県 個人蔵)

土佐光起(元和三―元禄四、一六一七―九二)の筆になるところの「芦雁図」一幅を紹介してみたい。光起の作品といえ、紙や絹の材質の違いや掛幅・屏風等の形状の相違には関係なく、まずほとんどいつてよいほど著彩ないし淡彩であるが、本図は純粹の水墨画である。

光起が水墨画に堪能であつたとして少しも不思議でない。土佐家において早く光信はその絵巻中の画中障屏画の水墨筆技に抜群の牙えを示していたし、父・光則も源氏絵等の白描画を得意としており、水墨技法に対して土佐家が常に関心を払っていたことは確かである。光起が宋元の古画を学んだことについては諸書に記すところであるが、それが単に李安忠の鴈図を究めることで鴈絵の名手になつたという次元にとどまらず、宋元水墨画をもその視野に入れていたものと思われる。『古画備考』に「松花堂筆意」による「人物立物」や「(狩野)尚信筆意」を示す「梅立物」とあることを注記しているのは、いわゆる土佐派風の著彩人物図ないし花鳥図とは異なる水墨画が存したことを強調するものと見なしてよいであろう。狩野尚信

は兄探幽の墨技にまさるとする時人もいたし、松花堂昭乗は江戸前期の茶の趣味にも合致した水墨画家と捉えるのが妥当であるから、如上の「人物立物」「梅立物」を水墨画と考へて何ら差支えない。

そしてこの「芦雁図」は水墨による「山水横物」である。横長の画面に濃墨と淡墨とで秋の風景を印象的に描いている。土坡から砂洲を続けて付立て風に表現し、水にいる雁の群れとそこに向かつて翔け降りてくる雁が描かれる。雁はその身体を薄墨で、くちばしと羽先、そして眼だけを濃墨でとらえる。その精緻な濃墨の使い方に土佐光信以来の伝統の力を見てとることができるだろう。全体的に見れば、この濃墨の点じ方が画面に快いアクセントを生じさせていることに気づく。気の利いた墨の節約。狩野派風の強すぎる線描表現を排した画面造り。主題と画風から敢えて宋元画にこれと雰囲気と同じくするものを求めるならば、北宋の趙令穰の作とされる「秋塘図」(大和文華館蔵ないし伝牧谿筆「芦雁図」(群馬県立近代美術館蔵)などが挙げられるが、もとより光起がこれらを直接に参考にしたという証拠はない。

ところで光起の水墨画が『国華』九一一号に紹介されている。それは「水墨山水図」で、縦長の画面に、手前に松林、水面の向うに山が幾重にも聳え立ち、その水の上には帆掛舟が泛んでいる。輪郭線は用いられていない。その出来映えはいえ、紹介者が「この絵、こまかに墨筆の行使や筆路を辿ってみれば、水墨の技に習熟した人の作とは思えない」という通りだと思われる。翻つて当該の「芦雁図」を見るならば、その差は歴然として明らかというべきであろう。勿論、「水墨山水図」は落款から光起が左近将監に任じられた承応三年(一六五四)以前の制作と考えられ、また「芦雁図」は延宝九

年（一六八一）に剃髪して以後の作と判ぜられるから、そのおよそ三十年の時間的懸隔が生んだ必然の差とみる余地もあるだろう。いずれにしても、この「芦雁図」は今後、土佐光起の水墨画を研究の対象とする場合に重要な材料になるものと思う。

款記は「土佐左近将監入道常昭筆」で、印章は白文方形「土佐／常昭」印。なお、宝暦二年（一七五二）七月付、「従五位下土佐守光芳（光起の孫）」の鑑定書が付属する。

（狩野博幸）



挿図1 芦雁図（落款部分）



図1 芦雁図 土佐光起筆

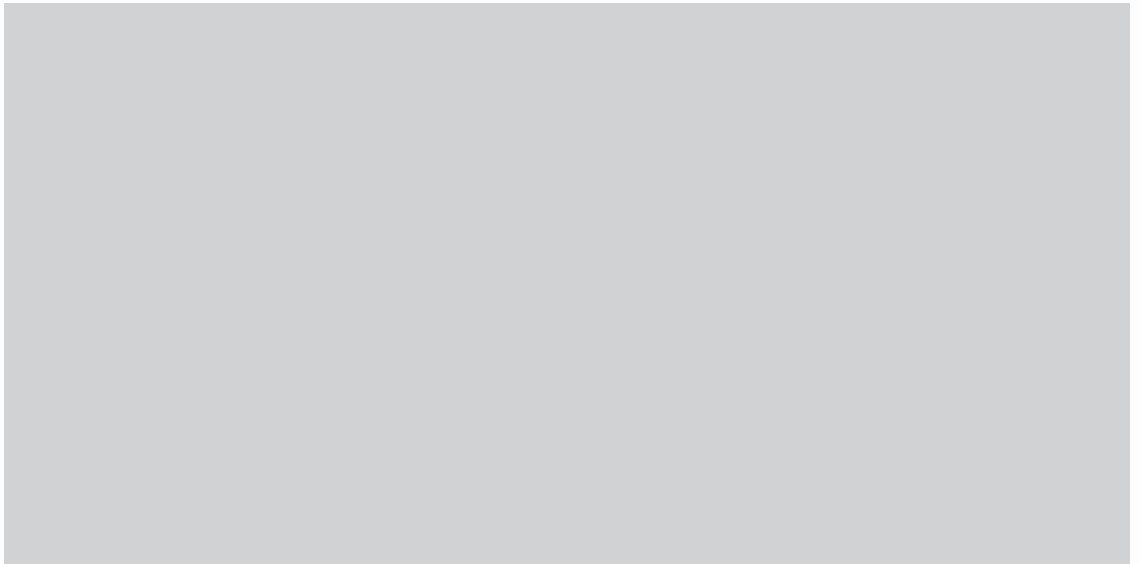


図2 芦雁図（部分） 土佐光起筆

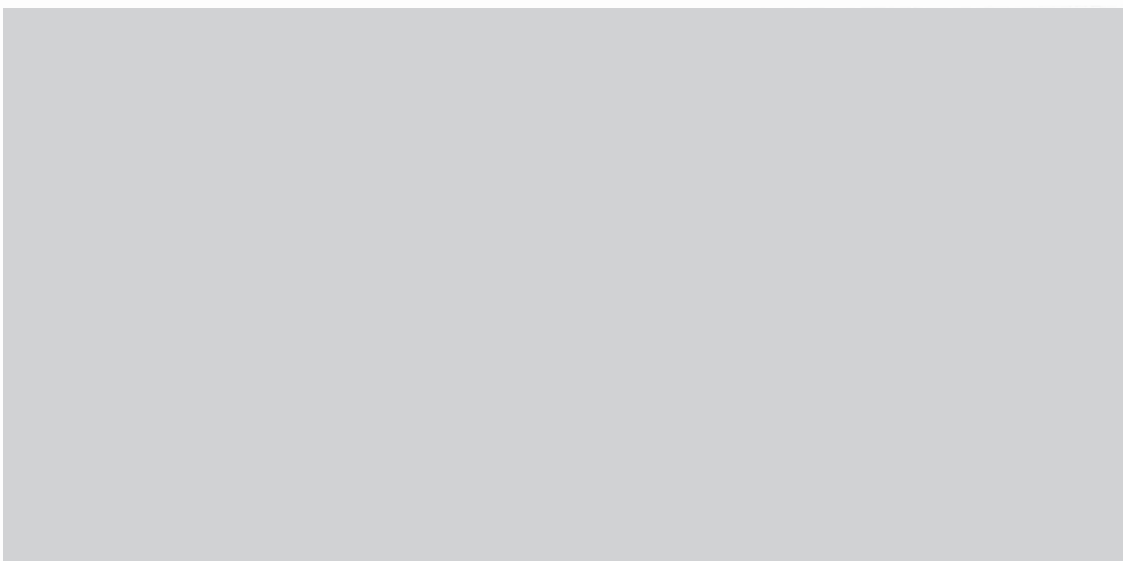


図3 芦雁図（部分） 土佐光起筆